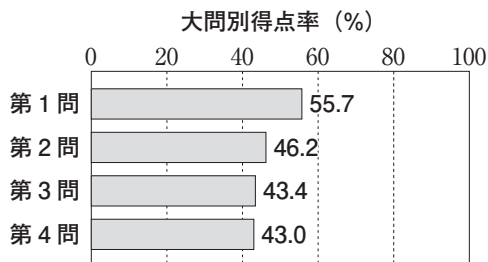
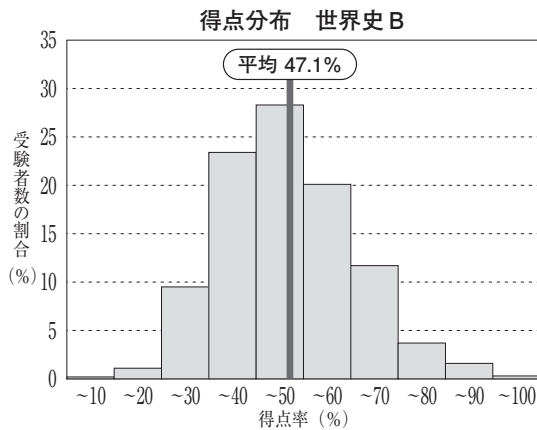


# 世界史B

世界史学習の前提である世界地理を克服し、近現代史までの学習を早急に始めよう！

## I. 全体講評

今回の平均点は47.1点であった。第1回のセンター試験本番レベル模試と考えると高得点と言えよう。しかし、今回の問題は基礎的な問題が多く、しかも学習済みであろう古代史が結構出題されていたことから考えると、当然の結果とも言える。毎年のことであるが、この段階では近現代史、とりわけ現代史が出来ない。現代史までの基本的な事項は、早急に押さえる必要がある。また、センター試験の形式は毎年ほぼ同じであることから、問題に慣れる必要がある。今年のセンター本試でも、この模試と同じような問題が少なからず出題されている。センター本試では繰り返し出題される事項も多い。大事なことは、今回と同じような問題が出題されたときに、次は必ず正解するという復習の徹底である。



## II. 大問別分析

### 第1問 世界史上の国家の統治政策

中国古代史・中世史の基本を確実に押さえよう。

第1問の得点率は55.7%と、全大問で最も高かった。この理由は、小問9題のうち古代・中世の問題が6題あったからであろう。とりわけ、オリエント古代の基本である「出エジプト」についての[2]の正答率は88.8%で、全小問中最も正答率が高く、満足すべき結果であった。これと同じ位基本的なアケメネス朝のサトラップを問う[1]の67.2%はいい結果とはいえ、もう少し出来てもよかったという疑問が残る。またイスラム教とアラビア語の広がり正答の[3]の68.7%も、[1]と同様な感じを持った。中国古代史の墨子を問う[4]の53.1%、漢代に起こった出来事として呉楚七国の乱を問う[6]の57.5%は、古代オリエント史に比べて低い。早急に中国古代史の基本を押さえる必要があろう。ヨーロッパ中世でグラナダの位置と内容を問う[7]の61.5%は、この時期としては満足すべき結果である。同じ中世でも、中国で起こった紅巾の乱を問う[5]は42.6%と低い。古代史同様、中国中世史も基本を押さえる必要があろう。[9]の誤文選択は27.7%で、第1問中最も低かった。パナマ運河建設着工の時期が誤っているのであるが、そもそもパナマ運河建設の着工の時期を問うというのは、一般的にも難問である。まだ学習が及んでいない近現代史で、ラテンアメリカの問題は受験者にはきついものがあったかもしれない。そう考えると戦後史のキューバ危機が起こった時期を問う[8]の35.5%という数字は、健闘した結果と言える。

### 第2問 世界史上の貨幣・紙幣

近現代史学習を早急に進めよう。

第2問の得点率は46.2%で、第3問・第4問より少し高かった。この理由は、元の日本遠征が正答である[12]の正答率が74.7%であり、得点率を底上げた結果と考えられる。この問題の知識は、中学段階で身に着いたものであろう。一方、この大問

で最も正答率が低かったのは、フランスとベルギーによるルール占領を問う[16]の26.4%であった。内容的にも細かく、学習がここまで及んでいない結果であろう。そう考えると、戦後ドイツの誤文選択で東方外交の内容が誤っている[18]の39.7%というのは、この時期としては満足すべきものであった。逆に、漢の武帝の事績について問う[10]の41.6%は、中国古代史の基本の問いと考えると残念な結果である。古代ヨーロッパのケルト人が正答の[14]の50.0%は、ケルト人がラテン人やゲルマン人ほど著名でない結果としても残念な結果である。同じように、ヨーロッパ近世の大航海時代のバルボアを問う[13]の39.5%、ヨーロッパ近世史の中心であるネーデルラントの歴史を問う[15]の46.9%も、今後は大きく伸びることを期待したい。中国史でも政治史以外はあまり学習が進まない。宋代の行と作を問うた[11]が49.2%であったことは、健闘した結果である。ワシントン会議についての[18]の48.5%という数字も、現段階としては仕方がない数字かもしれない。アメリカ合衆国の主要な都市がどこにあるかを知っておく必要を教えてくれた問題であった。

### 第3問 世界史上の君主・支配者

**世界の基本的な都市の位置を確実に把握しよう。**

得点率は43.4%で、第4問とほとんど変わらず低いものであった。近現代史が多かった結果かもしれない。少し心配になったのは、カルカッタ（コルカタ）の位置を問う[26]の正答率30.1%である。カルカッタについては、イギリスの3C政策との関連で正確な位置を知っておく必要がある。この機会に正確な位置を確実にものにしよう。ムガル帝国の初代バーブルが正答の[25]の33.9%も残念な結果である。司馬光の資治通鑑について問う[19]の36.4%も残念な結果である。康熙帝の事績について問う[21]の41.0%、アメリカ独立宣言が正答の[22]の44.6%、ヒトラーについて問う[24]の37.0%は、基本的なことであるが、現段階ではこの数字は仕方がないかもしれない。次回以降同じような問題が出たときは、確実に正解することを期待したい。鄭和が正答の[20]の56.9%という数字には驚いた。コミック誌に鄭和が連載されている結果なのか、この時期としては高い数字であった。同じようにネルーについての[27]の53.6%は、ネルーが象を日本に

寄贈したことを知っている受験者が多かった結果かもしれない。ビスマルクについて問う[23]の50.6%は、内容的にもそれほど簡単なものではなかったにもかかわらず、こうした数字が出たことは歓迎すべきことであった。

### 第4問 世界史上の海

**中学で学んだ歴史を確認しよう。**

第4問の得点率は43.0%で、全大問中最低であった。少々難解ととらえられる内容を含んでいた結果と考える。全小問中正答率ワースト1の18.5%の[33]は、1860年の（露清）北京条約でロシアが沿海州を手に入れたことが正文の問題である。ロシアの東アジア侵攻を決定づけた内容なので、ここできちんと押さえておきたい。中国と欧米列強の諸条約、とりわけロシアとの条約はここで身につけておく必要がある。ワースト2の24.4%の[36]は日本のシンガポール占領が正答であった。中学の歴史でこの内容は学習済みであろう。中学段階の歴史をもう一度確認する必要がある。ヴィシー政府がドイツに抵抗したという誤文を選択した受験者が30.5%もいたのには驚いた。一方、この大問中もっとも出来ていた十二表法が正答の[31]の60.0%は、ヨーロッパ古代の問題であるので当然の結果であろう。次に56.4%と出来ていたマカオが正答の[30]も、中学段階で学習済みと考えられる。サータヴァーハナ朝とバルトロメウ＝ディアスを問う[28]の56.3%は、近世南アジア史を考慮すると歓迎すべき結果である。同様にムスリム商人と香辛料貿易を問う[29]の49.5%と、サハラ以南のアフリカを問う[32]の42.8%は、現段階では妥当な数字である。オセアニアの歴史を問う38.5%の[34]と、門戸開放宣言の時期を問う38.9%の[35]は、今後克服されていくことを期待したい。

### Ⅲ. 学習アドバイス

◆**世界の主要な地形と国名を正確に把握しよう。**  
世界の主要な地形と現在の国名は、世界史学習の前提である。この2つを踏まえないければ先に進まない。基本的な地形と国名が出ている問題集をやることが望ましい。